The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	卑罵語の変化に見られる共通性について ： 複合動詞後項に位置する卑罵語の動作主の有生性に注目して
Author(s)	西谷, 龍二
Citation	語文. 2024, 123, p. 51-66
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100248
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

卑罵語の変化に見られる共通性について

――複合動詞後項に位置する卑罵語の動作主の有生性に注目して――

西　谷　龍　二

1　はじめに

本稿では、動作主を見下げる機能を持つ「卑罵語」と呼ばれる形式群、特に述語において複合動詞後項に位置する形式を扱う。現代共通語では、「活用語の連用形（以下、動詞で代表させ、「V」と記す）＋ヤガル」が代表的なものであり、近畿方言では「V＋ヨル・クサル」などがこれに該当する。現代において、これらの形式は、（1a）のように動作主が有情物の場合のほか、（1b）のように非情物の場合にも使用が可能であるとされている[(1)]（森山2021）。

（1）a　あいつ飯食いヤガッタ（アガッタ）／ヨッタ（オッタ）／クサッタ。

　　b　雨が降りヤガッタ／ヨッタ／クサッタ。（以上、すべて作例）

上記の形式は、その形式が出現する当初から動作主を見下げる機能を持っていたわけではなく、歴史的にその機能を獲得したと考えられている。本稿では、このような動作主を見下げる機能を獲得する変化を「卑語化」と呼んでおく。（1）に示したこれらの形式は、卑語化以前に有情物・非情物の両方を動作主とする例が確認できる。しかし、卑語化が生じた当初の用例を見ると、いずれの形式も動作主が有情物の例しか確認できない。そのため、卑語化が生じた際に、「有生性[(2)]」に関連する共通した変化があることが予測される。しかし、このような共通する変化は、卑語化を考える上で重要と思われるが、これまで検討が十分になされているとは言い難い。そこで、本稿では卑語化が生じる際を中心に、動作主の有生性について、どのような変化があるのかを明らかにしたい。

以下、次節では、卑罵語に関する先行研究の整理を行い、問題点を整理する。第３節は、研究の枠組みとして、動作主の有生性に着目する理由と調査方法・調査資料の概要を述べる。第４節は、各形式の動作主の有生性を調査し、卑語化前後の使用実態を記述し、共通して見られる変化を具体的に示す。第５節は、第４節における検討をまとめ、日本語諸方言・琉球語の卑罵語の形式について触れたい。

2 先行研究の整理と問題の所在

ここでは、本稿で扱う卑罵語について歴史的な先行研究を整理し、問題点を提示する。まず、複合動詞後項の位置において、卑罵語として用いられるＶ＋アガル（ヤガル）・Ｖ＋クサルが出現する時期については、山崎（1963）の記述がある。山崎（1963）は、卑罵語が体言のみに現れる時代と述語要素にまで現れる時代とに大別できると述べ、近世期以前は、体言のみに卑罵語が見られ、近世に入ると述語要素にも卑罵語が現れるようになると述べている。なお、卑罵語としてのＶ＋オルは、中世末期の言語状況を反映していると考えられる「虎明本狂言」から見られると述べている。

複合動詞後項に位置する卑罵語は、通時的な使用状況や卑語化などの意味変化が個別に考えられてきた。特に、「Ｖ＋オル・ヨル」は、西日本方言に広く見られるアスペクト形式としてのＶ＋ヨルの問題も関わるため、歴史的な立場からも盛んに議論が行われている。上代から現代までの文献資料におけるＶ＋オル・ヨルについては、本動詞「オル・イル」や「テオル・テイル」などその他の存在動詞に関わる表現も含め、金水（2006）や柳田（1991）などの議論によって、その意味、文体差、卑語化の様相が歴史的に調査されてきた。それらによって近世期以前の代表的な口語文献におけるＶ＋オル・ヨルの使用状況や意味が明らかになっており、卑語化の要因についても検討が行われてきた。また青木（2010）では、金水（2006）や柳田（1991）などの議論を踏まえた上で、抄物資料に見られるＶ＋オル・ヨル、Ｖ＋テオル（トル）の使用を分析しつつ、方言研究の知見も含め、卑語化の要因を考察している。このようにＶ＋オル・ヨルは、近世期以前の歴史的状況が明らかになっており、方言研究などの成果も加えた卑語化の要因に対する考察が行われている。ただし、卑語化後の状況については言及が少なく、卑語化前と卑語化後でどのような変化が見られるかは不明である。またＶ＋クサルは、山崎（1963）などによって、卑罵語として用いられることはわかっているが、Ｖ＋オル・ヨルとは異なり、卑語化前の状況も歴史的な過程が資料によって裏付けられているわけではない。Ｖ＋クサルのように卑罵語の中には、歴史的な過程が十分明らかでない形式もある。

複数の形式が卑語化する際に見られる共通性を述べたものとしては、澤田（2017）がある。澤田（2017）は、中世から近世の文献に出現する「補助動詞型」の卑罵語がどのように「卑語的意味（主語下位待遇的意味）」を獲得するかということを、Ｖ＋ヤガルを中心に考察した。澤田（2017）は、文献に出現する「補助動詞型」の卑罵語を本動詞と補助動詞の関係から整理しており、卑語的意味を獲得する過程を次

のように分ける。

（２）a　本動詞に卑語的意味（下位待遇的意味）が認められ、その卑語的意味（下位待遇的意味）が補助動詞において継承されているタイプ。

b　本動詞には卑語的意味（下位待遇的意味）が認められず、卑語的意味（下位待遇的意味）が補助動詞において新たに獲得されたタイプ（ただし、本動詞の中に卑語的意味（下位待遇的意味）につながり得るような「マイナス的意味」（金水2001：18）を含む場合はある）。（澤田2017：167）

（2a）には「けつかる・さらす・ほざく・こます・てくれる」、（2b）には「あがる（やがる）・くさる・さがる（島根県）」が該当すると述べる[(3)]。澤田（2017）の整理により、補助動詞型の卑罵語は、本動詞にもともと「卑語的意味」があるか、補助動詞において新しく獲得するのかという大きく 2 つのタイプに分けられることがわかる。

従来の研究では、V＋オル・ヨルのように卑罵語になるまでの記述は多いが、卑語化後の状況は不明な点が多い。またV＋クサルなど卑語化前の過程も十分明らかではないものもある。そのため、複合動詞後項に位置する卑罵語を複数取り上げ、卑語化が生じた際に見られる共通性を記述・検討したものは少ない。澤田（2017）のように卑語的意味の獲得方法という点から、共通する変化をパターン分けしたものはある。しかし、これは「本動詞・補助動詞」という関係からの整理であり、第 1 節で示したような有生性に関する共通点などは十分明らかではない。卑語化により動作主が有情物に限定されるという現象は、動作主を見下げるといった卑語的意味がどのようなものであるかとも関わり、重要なものと考えられる。そこで、本稿では、複合動詞後項に位置する卑罵語に共通する変化として、その動作主の有生性の変化を取り上げる。

3 研究の枠組みについて

本稿は、複合動詞後項に位置する卑罵語について、卑語化が生じる過程で何らかの共通する変化が生じている可能性がある、という問題意識を持つ。第 1 ・ 2 節で示したように、本稿は、動作主の有生性に注目する。本節では、動作主の有生性に着目する理由を説明し（3.1）、次に調査方法・資料について述べる（3.2）。

3.1 動作主の有生性に注目する理由について

まず、動作主の有生性に注目する理由を述べる。これまで、稿者は、卑語化が生じた後の中世末期以降の上方語・大阪方言におけるV＋オル・ヨル、近世期以降の

V＋アガル・ヤガルについて調査を行い、前接動詞（テ形補助動詞・ヴォイス形式は除く）の変化、有情物・非情物を動作主とする用例数の内訳を報告した（西谷2022・2023）。第 1 節でも述べたように、どちらの形式も卑語化が生じた初期の用例は、動作主が有情物の例しか出現せず、一部の例を除くと、近代以降になってから非情物を動作主とする例が出現することを指摘した（第 4 節で具体的な例を示す）。ただし、西谷（2023）でも触れたが、卑語化以前の口語資料の 1 つである抄物には、非情物を動作主とするV＋オルの存在が指摘されている（青木 2010）。西谷（2023）は、卑語化以降の状況を明らかにすることが目的だったため、この現象を十分扱えておらず、今後の課題としていた。そこで、本稿では、そのような卑語化以前の状況も合わせ、動作主の有生性に着目することで、なんらかの共通する変化が取り出せるのではないかと考えた。

3.2 調査対象と調査法について

本稿では、複合動詞後項に位置する卑罵語の中でも、語彙的資源がこれまでの研究からわかっている「オル・ヨル、クサル、アガル・ヤガル」を歴史的に調査する。「オル・ヨル」「アガル・ヤガル」は、先行研究やこれまで自身が調査してきたデータを利用し、不足する部分に関しては追加で調査を行った。また「クサル」に関しては、稿者が新しく調査を行った。「オル・ヨル」・「クサル」は上方語・大阪方言資料を対象とした。「アガル・ヤガル」は、近世前期までは上方語資料を対象とし、それ以降は主に江戸語・共通語資料を対象とした。

調査方法はそれぞれの形式の動作主が有情物であるか、非情物であるかを指標に、卑語化前と卑語化後の状況について調査する。卑語化以前については、一部を除き、本動詞と複合動詞後項に位置する場合の両方を調査した。用例調査は、『日本語歴史コーパス』（以下「CHJ」と記す）を中心に用いた。また、用例収集が CHJ の収録範囲では限りがあり、十分な用例数が得にくい形式もあるため、適宜、CHJ の収録範囲以外の文献資料、先行研究の挙例も用いた。

4 調査結果

4.1 オル・ヨル

ここではV＋オル・ヨルの動作主の状況を述べていく。終止連体形の統合以前の「オル」は「ヲリ」と表記する。上代・平安時代の和文資料において、ヲリの動作主が有情物であるか、非情物であるかを調査した研究として、「万葉集」を調査した瀬良（1957）や、平安時代の和文資料を調査した沼田（1979）がある。瀬良（1957）

や沼田（1979）は、上代・平安時代の和文資料に見られるヲリの動作主が、ほとんど「人間・鳥類（動物）」であることを指摘するが、例外として「船」にヲリが使用される例が確認できると述べる。[(4)] なお、瀬良（1957）や沼田（1979）は、V＋ヲリの例も含んだものであるため、V＋ヲリも同様の結果と考えられる。（3）は上代・中古の例外とされる「船」の例を示している。瀬良（1957）は、（3a）が東歌であると指摘している。また沼田（1979）は、（3b）が能因本において「潟なる大船」と異同があることを指摘しており、この例の存在を疑問視している。

（3）a　埼玉の津に居る〔乎流〕舟の風を疾み綱は絶ゆとも言な絶えそね

（「万葉集」・3380　10-万葉0759_00014,11050）

b　むとくなるもの潮干の潟にをる大船

（「枕草子」・むとくなるもの　20-枕草1001_00121,170）

上記の研究とは異なる立場として、金水（2006）の見解がある。金水（2006）によれば、上代において「止まる・座る」という意味を表す動作動詞であった「キル」の唯一の「状態化形式」がヲリであったと述べる。そのため、現代語と異なり、ヲリは動作主の有生性による使い分けがあるわけではないことになる。また金水（2006）は、沼田（1979）の（3b）に関する記述を踏まえた上で、上代にも「船」が動作主となる例があることを述べ、「動くものが静止するという「ゐる」の本義からすれば、この例もさほど奇異ではない」（p.173）と述べている。本稿も、川や海などを移動する「船」が、一時的に港・潟といった場所に停泊した／している際に、ヲリが使用できた可能性があると考えており、金水（2006）と同様に上代・中古のヲリは、動作主の有生性に基づく使い分けがない立場をとる。ただし、実際の使用実態としては、動作主が有情物である例がほとんどであるといえる。

鎌倉時代の散文の状況は、來田（1997）、金水（2006）の記述があるが、本稿も新たにCHJを用い、調査を行った。[(5)] CHJ所収の鎌倉時代編の資料におけるヲリ（オル）の例（本動詞は21例、V＋ヲリ（オル）は21例）を確認すると、その動作主はすべて有情物であり、非情物の例は出現しなかった。これらの使用実態から、鎌倉時代の本動詞・V＋ヲリ（オル）は、動作主が有情物に限られていたと考えられる。本動詞、V＋ヲリ（オル）の例をそれぞれ以下に挙げておく。

（4）a　（…）この大臣一人、「王土にをらん虫、皇居を建てられんに、何のたたりをかなすべき。（…）（「徒然草」207段　30-徒然1336_01207,1400）

b　［※虎は鰐に前足を噛まれ、血が出ている］その切れたる所を水に浸して、ひらがりをるを、「いかにするにか」と見る程に、（…）（「宇治拾遺物語」巻第三・七　30-宇治1220_03007,3890）

さて、室町時代の口語資料の１つである抄物には、Ｖ＋オル・ヨルがアスペクト形式として用いられることが指摘されている（湯澤1929、柳田1991、青木2010）。次の（５）は動作主が有情物と見られるものである。また（６）は青木（2010）で非情物を動作主とする例として紹介されているもので、「水旱（洪水と旱魃）」が「変ず」の動作主となっている。

（５）a　而燕――燕趙カラ、秦ヘイツタモノトモハ、諸侯ノ事レ秦ニ事ヲ、本ニ云テ、其主ニ説キヲルソ。（「史記桃源抄」蘇秦列伝［1477］：３-180-11）

b　此ノ詩ハ衛ノ荘公ノ賢人ヲ不レ用ホトニ山ノカゲ谷ノヲクニカヽマリヲルヲソレヲソシツタソ（「玉塵抄」［1563］：巻50・51ウ）

（６）水旱カチヤツ／＼ト變ジヲル程ニ舟車ヲモエコレラヘイテカアラウスラウト云ソ（「四河入海」［1534］・巻８ノ１・28ウ（青木2010：178））

また以下の（７）のように、典型的な有情物・非情物の例とは解しにくい例もある（湯澤1929、青木2010）。

（７）a　○三年病テアル眼ハ大略ハナヲリヨツタソ

（「三体詩絶句抄」［1537］巻４・24ウ[6]（湯澤1929：181））

b　我レ此間獄中ニ百日アリシガ、今漸春ニナリ天恩於万物時分ニナリヨル程ニユルサレテ出獄帰ゾ

（「四河入海」［1534］・巻25ノ４・18オ（青木2010：178））

（7a）は「（三年の間、病である）眼」が「ナヲリヨツタ」の動作主である。「眼」は身体部位であるため、有情物と考えることも可能だが、周辺的な例といえよう。（7b）は、「天恩万物に於ける時分になりよる」と訓読する部分と見られ[7]れ、「ナリヨル」の動作主は「天恩」と考えられる。「天恩」については、「天のめぐみ」あるいは「天子の恩」といった語釈が『日本国語大辞典　第二版』（小学館）に挙がっている。「恩・めぐみ」という語自体は、非情物と考えられるが、「天子・神」などの存在が背後にあると考えることもできるため、有情物に近い使用といえるかもしれない。鎌倉時代の散文の例と抄物の例を踏まえると、Ｖ＋オルという形式は、動作主が有情物のみだった状況から、非情物にも拡張したことが想定できる[8]。

その後、中世末期に卑語化が起こると、動作主の有生性に制限が生じる。西谷（2023）では、卑語化後の動作主の有生性について記述した。Ｖ＋オルが卑語化したと考えられている中世末期の「虎明本狂言」では、動作主が有情物のみであり〔→（8a）〕、近世期に入ると非情物の例も見られるが、意志動詞が用いられるなど、擬人的な使用も含まれる。それらを除くと非情物を動作主とする例は極めて少なく、例外的であることを指摘しており、中世末期から近世後期までは、ほぼ有情物に限ら

れる。非情物を動作主とする例が見られるようになるのは、近代以降であり、このような使用が現代のＶ＋ヨルの状況につながっていると解釈した〔→（8b）〕。

（８）a　今の物がたりはぶんざう、とにかくに、くらはじなひ物をたべおつて、某によひほねをおらせた、あちへうせおれ[太郎冠者]かしこまつた

（「虎明本狂言」・文蔵　40-虎明1642_02014,29010）

b　[小兒]「何や知らんと思つたら筍がニューッと生(はへ)おツた

（落語速記「天下嘘背較」［1890］：18（西谷2023：32））

上記のことからＶ＋オルは、上代・平安時代の和文資料において、動作主が有情物・非情物で使い分けがなされているわけではないが、使用実態として、動作主が有情物に偏っている。鎌倉時代の散文には、非情物の例は見られないが、室町時代の抄物には、非情物を動作主とするＶ＋オル（ヨル）の例も見られるようになる。その後、卑語化が生じた中世末期以降には再び、Ｖ＋オルの動作主が有情物に限定されるという変化が生じている。

4.2 クサル

次に「クサル」の動作主の状況を述べる。CHJの語彙素を「腐る」として検索を行ったところ、卑語化が起こったとされる近世期以前の用例は、３例しか得られない[(9)]。用例が乏しいため、先行研究や調査できた抄物の例も合わせて述べる。今回の調査において、Ｖ＋クサルという形は、近世期に入ってから出現が確認できたため、それ以前は、本動詞の状況を示す。クサルが本動詞として使用される場合は、有情物・非情物の両方が動作主になる。確認できた用例は少数だが、中世前期以前の例を（９）に示す。(9a）は、矢田（2001：207）において「精神が堕落する、いじけるの意も平安時代後期には生じていた」と説明される例である。この用法はその意味から有情物を動作主とする場合の用法と考えられる。

（９）a　くさりたる讃岐前司古受領の、鼓打ちそこなひて、立ちたうびたるぞかし

（「大鏡」　20-大鏡1100_02002,65520）

b　次　食物以下ノサカリスキテクサル如何

（「名語記」［1275］巻８・27ウ：908）

上記の例よりも時代がくだった室町時代の「応永本論語抄」にも、クサルの例を確認することができる。(10a）は水の近くにある「塀の下地」が、(10b）は「肉」がクサルの動作主であり、動作主が非情物の例である。

(10）a　喩ハ水ノ近キ処ニアル屏ナトハ漸々ニ湿気カカ(ママ)積リテ上ヘハミエネトモ下地カクサリテソトシタル風ナトニモ一度ニコロフ如ク、(…)

（「応永本論語抄」・顔淵第十二［1420］：497）

b　祭肉不出三日　出三日不食之矣　　是ハ我家ニ祭ル時ノ了也。我家ノ祭ニハ肉ナトモ多ホトニ一夜マテハ残シ置アリ。三日ヨリ。後マテハ不置、三日ノ中ニ皆人ニクワスル也。三日ニ過レハ其肉カクサル程ニ、三日過タルヲハ不食也。（「応永本論語抄」・顔淵第十二［1420］：440）

近世前期に入ると、それまで見られなかったＶ＋クサルという形で動作主を見下げる卑罵語としての使用が出現する〔→（11）〕。（11a）は「おうじやくもの」が糞をたれて逃げる場面であり、（11b）は刀屋の主人が職人の「半七」を批難する場面である。ともに有情物を動作主とする例である。

（11）a　（…）わうじやくものきもをつぶし、糞をたれてにげける。竹斎是を見て、はなに手をあてゝ、さても／＼、大き成事をしくさつたといはれた。

（噺本前期「竹斎はなし」［1672］：231）

b　〔刀屋主人石見某→半七〕親代々の刀屋を、太鼓持にするのみか座敷を揚屋にしくさつた、お礼申すと、突き倒し柄差箒押つ取つて、（…）（近松世話物「長町女腹切」 51-近松1712_09001,28170）

近世前期以降の上方語・大阪方言資料において、Ｖ＋クサルの動作主が有情物であるか、非情物であるかを調査した結果を示したのが表１である。(10)

表１　Ｖ＋クサルの動作主（有情物・非情物）の内訳

	資料名	有情物	非情物	計
近世前期	近松世話物	4	0	4
	その他演劇	2	0	2
	噺本前期	2	0	2
近世後期	噺本後期	26	0	26
	大坂板洒落本	10	0	10
	半水戯作	25	0	25
明治大正	落語速記	17	0	17
	SP盤落語	4	0	4
	小説	0	0	0
	五郎脚本	0	0	0
昭和（～戦前）	小説	5	0	5
	上方はなし	26	0	26

表１からわかるように、近世以降に見られるＶ＋クサルの動作主は有情物のみであり、非情物が動作主となる例は上記の調査資料中には見られない。

以上を踏まえると、近世以前は、本動詞のみ使用が確認でき、有情物、非情物の両方を動作主とすることができた。近世期以降の上方語・大阪方言資料には、Ｖ＋クサルの例が見られるようになり、その動作主は有情物の使用のみであった。森山（2021）は、現代のＶ＋クサルが非情物を動作主とする場合にも使用できると述べる

が、今回対象とした資料中には使用が見られなかった。資料の制約の可能性も考えられるが、V＋クサルが非情物を動作主とするのは、近代から現代の間で拡張したものと考えられる。

4.3 アガル・ヤガル

最後にアガル・ヤガルの動作主の状況を述べる。近世期以前は、本動詞・V＋アガルの両方において、有情物・非情物の両方を動作主とする例が確認できる。(12) には有情物、(13) には非情物が動作主となっている例を本動詞、V＋アガルの順に示した。これらの点から、卑語化以前のアガルには、本動詞、およびV＋アガルの両方に、動作主の有生性に関する制限が存在しないことが予測される。

(12) a　内大臣あがりたまひて、宰相中将、中納言になりたまひぬ。御よろこびに出でたまふ。(「源氏物語」・藤裏葉　20-源氏1010_00033,81630)

b　〔薫→浮舟〕あまたの年ごろ、この道を行きかふたび重なるを思ふに、そこはかとなくものあはれなるかな。すこし起き上がりて、この山の色も見たまへ。いと埋れたりや」と、(…)

(「源氏物語」・東屋　20-源氏1010_00050,288380)

(13) a　朝顔の露落ちぬ先に、文書かむと、道のほども心もとなく、麻生の下草など口ずさみつつ、わが方に行くに、格子の上がりたれば、(…)

(「枕草子」・七月ばかり、いみじう暑ければ　20-枕草1001_00034,4680)

b　宮へ参りつつ、通夜をしたりし、夜中ばかりに御殿の上に火燃え上がりたり。宮人騒ぎののしるさま、推しはかるべし。

(「とはずがたり」巻四　30-とは1306_04008,16560)

V＋アガルが卑罵語として用いられるのは、近世前期に入ってからである。近世前期の上方語資料では、V＋アガルの例がほとんど出現しないが、近世後期以降の江戸語・共通語資料では、「V＋ヤガル（ヤァガル等も含む)」の形で使用が豊富に見られるようになる（澤田 2017・西谷 2022)。それらの動作主は（14）のような有情物に限られ、非情物が現れるのは近代以降である〔→（15)〕(西谷2022)。

(14) 客あごたたたきやあがると鼻つぱしらちりけへたたき出すぞ

(洒落本「郭中奇譚」 52-洒落1769_01001,82100（西谷2022：71))

(15) 外は小糠雨が降て居ます。(…)『いつまで降りやがるんだらう』彼は恁う言つて煙管を置くと共に舌打しました（「幸福物語」 60M 婦倶 1925_06166,22920（西谷2022：69))

このような「V＋アガル」の卑語化について、澤田（2017：166）は、(16) の例

を挙げ、中古以降の中央語において見られる「平常心や慎みを失い（興奮して）、動作が度を越して激しくなる」という用法を基盤にしたと述べる。このような用法から、他者の度を越した動作に対する話者の卑語的感情が会話的推意として働き、形式に焼き付くことで卑罵語の用法が確立したと主張する。

(16) a （…）打杭うち立てはべりし所に立てはべりし。男ども、『所こそ多かれ、ここにしも』と言ひはべりしを、やがてただ言ひに言ひあがりて、車のとこしばりをなむ切りてはべりける。さて、人うちけるは、それはなめげに言ひたてりしを、憎さに、冠をなむうち落として、男ども引きふれはべりし。

（「落窪物語」 20-落窪0986_00002,323030）

b 三条内大臣、御もとに、客人まうで来たりけるに、隣に公重の少将の居られたりけるが、この殿の侍と、ものをいひあがりて、大つぶて打ちけるものは、そひ給ひたる、かたはらの格子を、いとおびたたしく打ちたりければ、客人、気色おぼえけるに、人を召して、（…）

（「十訓抄」第八・二　30-十訓1252_08002,540）

ただし、澤田（2017）は、V＋アガル全体の用法の推移を記述しているわけではないため、V＋アガルに話者の卑語的感情が焼き付く過程は、十分に示されていない。この部分に関する検討は必要であるが、今回は澤田（2017）の説を踏まえて考えたい[(11)]。このような「動作が激しくなる」という意のV＋アガルは、次のような「虎明本狂言」の例につながるものと見られる。(17) の「申しあがって」の部分には、本稿の「虎明本狂言」の底本の頭注（大塚2006：124）にだんだん激しく言うという意味として「言いあがる」が示されており、その謙譲表現と記載がある[(12)]。

(17) 其事で御ざる、わたくしハ馬ばくらうで御ざるが、御せいさつのことく、早々まいつて、一のくひにつなひで御ざれハ、いつのまにか、あそこな者がまいつて、結句私にのけと申程に、それを申あがつての事で御ざる、ありやうに聞わけてくだされい（「虎明本狂言」・牛馬　40-虎明1642_01024,10100）

このような「興奮して動作が度を越して激しくなる」という意は、有情物にのみ見られる用法と考えられ、非情物が動作主の場合は生じえない。澤田（2017）の卑語化の説を踏まえると、V＋アガルは、V＋アガルの全体の用法のうち、有情物を動作主とする用法の一部のみが卑語化したと考えられる。

5 記述のまとめと日本語諸方言・琉球諸語における卑罵語について

5.1 小括

まず、ここまで記述・検討してきたことをまとめておく。第4節では、複合動詞

後項に位置する卑罵語である「V＋オル・ヨル、クサル、アガル・ヤガル」の動作主の有生性を記述してきた。いずれも卑語化以前は、有情物・非情物の両方を動作主に取る例が見られ、卑語化が生じると、動作主が有情物に限定される変化が見られた。この記述に加え、それぞれの形式の変化の状況を考えると、卑語化以前に複合動詞後項の位置の用法があるかという観点と、用法全体が卑語化するか、用法の一部が卑語化するか、という観点から、次のような整理を行うことができる。

A）　卑語化以前は、本動詞としてのみ使用され、動作主に制限がなかったが、卑語化が生じ、複合動詞後項の位置で卑罵語として用いられるようになると、動作主が有情物に限定されるタイプ（例：V＋クサル）。

B）　①卑語化以前にも、複合動詞後項の位置で使用が見られ、動作主に制限がなかったが、卑語化すると動作主が有情物に限定されるタイプ（例：V＋オル・ヨル）

②卑語化以前にも、複合動詞後項の位置で使用が見られ、動作主の制限がなかったが、全体の用法のうち、有情物を動作主とする用法のみが卑語化するタイプ（例：V＋アガル・ヤガル）。

また森山（2021）が示す現代の状況から合わせて考えると、卑語化が生じたのちに、非情物に拡大することは、V＋オル・ヨル、V＋アガル・ヤガルの記述を踏まえると、近代以降である。V＋クサルについても、今回調査した資料には見られないが、近代から現代の間に出現したものと考えられる。また、複合動詞後項に相当する卑罵語が、動作主を非情物に拡大したのち、再びその動作主を有情物のみ、または非情物のみに使用範囲を縮小させる変化は見られない。

5.2 その他の本土諸方言・琉球諸語における卑罵語

このような卑語化が生じる際に見られる共通する変化の過程を踏まえ、上記で検討した以外の本土諸方言・琉球諸語の形式についても考えてみたい。ここでは、その試みの例として、出雲方言の「V＋サガル」を考えたい。澤田（2017）では、出雲方言において、V＋サガルがV＋ヤガルに相当するものとして使用されていると述べる[(13)]。澤田（2017）は、出雲方言の母語話者にV＋サガルの調査を行い、（18・19）のような調査結果を示し、意志的な動作主が主語に立つ場合は使用できるが、意志的な動作主が主語に立たない場合は許容できないと述べる。

（18）a　おまえ、そぎゃんこと言い<u>さがって</u>！
　　（おまえ、そんなこと言いやがって！）
　　b　とっとと行き<u>さがれ</u>！（とっとと行きやがれ！）

(19) a ＊雨が降ってきさがった。(雨が降ってきやがった)

b ＊タイヤがパンクしさがった (タイヤがパンクしやがった)

(以上、澤田2017：155-156の挙例の一部を体裁を変えて引用)

(18・19) に示すように出雲方言のV＋サガルは、意志的な動作主しか主語に取る用法しかないため、非情物が動作主になることは考えにくい。この出雲方言のV＋サガルがいつ頃、どのように卑語化したかは、資料の制約上、検証することは難しい。そこで、ここまで記述してきた卑語化の歴史的な議論をもとに変化の過程を考えたい。第 4 節で記述したように、上方語・大阪方言、江戸語・共通語において、複合動詞後項に位置する語が、卑語化する場合、動作主は有情物に限定される。これと同じ変化が、V＋サガルにも生じたと仮定しよう。そうすると、現代のV＋サガルは、卑語化が生じ、動作主が有情物に限定され、それが非情物にまで拡張していない状況と解釈できる。この他、変化の可能性としては、卑語化が生じた際に、動作主の有生性に関する制限が生じていなかったが、次第に動作主を有情物に限定させる変化がありうる。しかし、(5.1) で記述したように、江戸語・共通語や上方語・大阪方言では、卑語化が生じたのちに、動作主が拡大する変化はあっても、縮小する変化は確認できない。そのため、後者の変化が生じた蓋然性は相対的に低いと考えられる。

この他、本土諸方言には、長崎・佐賀において、卑罵語としての使用が指摘されている「V＋ハタス」がある (加藤1997)。V＋ハタスについては、中世後期のキリシタン資料の 1 つである「日葡辞書」に用法が掲載されおり、「〜し終わる・終える」という記述が見られる〔→ (20)〕。このような用法から卑語化が生じたと仮定すると、アスペクトの用法から卑罵語へという意味変化があることになる。

(20) ある事をなし終える．この動詞は，多くの動詞の語根〔連用形〕に接続するが，この場合には，その語根の意味する動作をし終えることを示す．例，Yomi fatasu.（読み果す）読み終わる．Caqi fatasu.（書き果す）あることを書き終わる，など．(「邦訳日葡辞書」[1603] Fataxi・su・asita：212)

また琉球諸語にも複合動詞後項に位置する卑罵語が存在する。野原 (1992) では、沖縄語那覇方言の待遇表現形式を取り上げており、卑罵語と考えられる形式も取り上げている。その中の「助動詞」の項目に、「③クヮイン (〜しやがる。侮蔑の意の動詞クヮインから出た形。いろいろな動詞に付く)」「④ミシリ，ミシレー (〜しやがれ。ミシーン〔見せる〕の命令形から出たものか)」(ともに野原1992：13) という形式を挙げており、「V＋ヤガル」を標準語訳として示している[(14)]。野原 (1992) で挙例されているそれぞれの形式を 1 例ずつ示す。

(21) a　やーヤ　ヌー　シークヮトーガ（お前は何しやがっているのか）

b　カシマサヌ　アマンカイ　イチミシリ（うるさい！向こうに行きやがれ）

（野原1992：13（下線は野原による））

上記の本土諸方言や琉球諸語に見られる形式と本稿の記述を突き合わせることで、卑語化に関する議論を深めることや、精緻な理論化が更に可能になると考える。今後、これらの形式についても考えていきたい。

6 おわりに

本稿では、動作主を見下げる機能を持つ卑罵語と呼ばれる形式群のうち、「V＋オル・ヨル、クサル、アガル・ヤガル」を対象に、卑語化以前・以後の動作主の有生性に注目し、記述を行った。本稿では以下のことを述べた。

A）「V＋オル・ヨル、クサル、アガル・ヤガル」は、卑語化する以前は動作主の有生性に関する制限が見られないが、卑語化すると、動作主が有情物に限定される。また非情物への拡張は、主に近代以降に生じたと考えられる。さらに一度拡張が生じた後、再度、動作主が有情物、非情物のどちらかに縮小する変化は見られない（第4節、5.1）。

B）現代出雲方言におけるV＋サガルについて、上記の共通する変化をもとに、その変化の過程について解釈を行った。V＋サガルの状況も本稿で記述した形式と同じような変化をした蓋然性が高いことを述べた（5.2）。

本稿では、なぜ卑語化すると動作主が有情物に限定されるのかといった要因や、その意義については、十分考察が及んでおらず、問題として残っている。今後、(5.2)で示した形式なども合わせて、その要因、意義についても考えていきたい。

注

(1)非情物を動作主とする場合は、動作主となる非情物を見下げているとは考えにくい。このような場合は、事態に対する話者の否定的評価を表すものと考えている（西谷2022・2023も参照）。本稿では、このような使用も卑罵語の一用法として扱う。

(2)本稿で着目する「有生性」とは、動作主となる名詞がanimateであるか、inanimateであるかの違いを意味するものとして使用する。Silverstein（1976）、角田（2009）などが述べる名詞句階層などにおける「有生性」とは異なることを述べておく。

(3)澤田（2017）は、「V＋オル（ヨル）」のタイプを明言していないが、ほかの箇所で金水（2001）を踏まえ、本動詞の「下位待遇的意味」が先鋭化したものと考えている。そのため、(2a)のタイプと解釈していると考えられる。なお、澤田（2017）では、主語下位待遇型と、非主語下位待遇型に卑罵語を分けるが、ここでは、その両方をまとめて整理を行っている。

(4)平安時代の「ヲリ」については、950年以降の和文作品に見られる「ヲリ」に卑語的意

味を認めるか、見解が分かれている（金水2006・柳田1991）。金水（2006）では、平安時代に入り、タリの伸長によって、「ヰタリ」と「ヲリ」が競合し、「ヰタリ」が優勢になることで、「ヲリ」に卑語的意味が生じたとする。しかし、柳田（1991）では、平安時代のヲリに卑語性はないとしており、意見がわかれている。

（5）CHJでは、「語彙素読み－オル」「語彙素－居る」で検索を行った。この検索では、漢字表記で「居る」となっている例も得られる。これらの例は「イル」と読む可能性も否定できないため、「居ら・居り・居れ（命令形）」と表記されている場合と、「オル」などと仮名表記されている場合のみを対象とした。和歌や訓読部分の用例は除外し、「V＋テ＋オル」という形で出現する例は、分類上、本動詞に集計した。

（6）湯澤（1929）では、元和 6 年の 6 冊物（跋文に「于時元和第六庚申仲夏吉旦 前南禅古澗叟慈稽誌焉」「二條玉屋町村上平楽寺」と刷った刊本）を参照し、「巻 4 の34ウ」と出典を示す。ただし、同じ跋文を持つ国文学研究資料館蔵本の該当箇所を確認したところ、当該例は確認できず、「巻 4 の24ウ」にあることがわかった。

（7）稿者が確認した国会図書館蔵本の古活字版に見られる訓点に基づく。青木（2010）も古活字版を底本にしていることを明記しているが、訓点は用例中には示されていないため、異なる諸本を調査に使用したものと考えられる。

（8）ただし、抄物といっても資料の性格、内容、製作者は様々であり、抄物のＶ＋オルに卑語性があるという主張もある。來田（2001）では「四河入海」に関わった一韓智翊の手による他の抄物である「臨済録抄」に見られる「Ｖ＋オル（原文では「ヲリ」）」が「軽卑表現」であると主張する。抄物は、典拠、作成にかかわる人々によってさまざまな性質があるため、それぞれの資料を丁寧に読解し、調査する必要がある。今後、そのような調査を行っていきたい。

（9）『古語大鑑』の「腐る」の補説には、「中古和文には用例が殆ど無く、同意では「く（朽）つ」が使用されている」（p.271）という記載がある。中世以前の調査に用いたCHJの収録作品は和文が多く、中世以前の用例数がほとんど見られない状況は、この特徴を反映したものと考えられる。

（10）調査した上方語・大阪方言資料は、西谷（2023）と同じものである。具体的な作品は西谷（2023）を参照されたい。またＶ＋クサルは、CHJの調査では、キーを「語彙素－腐る」、「前方共起条件」を「キーから 1 語」と設定し、「活用形－大分類－連用形」として設定したものに、語彙素が「言い腐る・し腐る・寝腐る・踏み腐る」となっているものを加えた数値である。

（11）この他、「Ｖ＋アガル（ヤガル）」の卑語化の検討は、金水（2001）や吉田（1971）がある。金水（2001）では、「食べる・飲む」の尊敬語「上がる」が補助動詞として使用され、それが次第に敬意を失い、「卑しむべき対象に対して半ば戯言的に使われたものが固定化し、卑語となった」（金水2001：18）という仮説を述べる。ただし、金水（2001）も述べるように、それを裏付ける具体的な例が得られないため、この説を取ることは難しい。また吉田（1971）では、「し終わる・してしまう」というアスペクトに関わる用法から派生したと考え、「みずからする動作の完了が、優越的なニュアンスを伴い、それがやがて、傲慢・無礼に受けとられ、対者の疎外感を生んだのであろう。軽卑の補助動詞に転じたのはそのような語感の推移による」（p.504）と述べる。吉田（1971）は、現代語を対象としているため、この仮説が歴史的に実証されているわけではない。

ただし、(5.2) で述べる「V＋ハタス」がアスペクトに関わる用法から卑語化した可能性も考えられるため、V＋アガルもアスペクト的な用法から卑語化した可能性は、否定できない。

(12) 当該箇所の頭注には、「言いあがる」の例として「吾ガ才智ヲホメタソ…タカウ吾カ才徳ヲ云イアゲタソ、玉塵、十四 6 オ」(大塚2006：124) と例が挙げられている。国会図書館蔵本の「玉塵抄」を用いて、当該部分を確認したところ、(Ⅰ) の例が見られた。ただし、大塚 (2006) の挙例も (Ⅰ) も「言いあげる」の形を取っている。大塚 (2006) の「玉塵抄」がどの諸本を底本にしているかは不明だが、この例を「言いあがる」の例として考えてよいかは疑問が残る。

I. 吾ガ才智ヲホメタソヒトリホメテ云タソ自負(フ)自－慢トニ似タ冂ソ高(ク)－自トヨマウカソタカウ吾カ才徳ヲ云イアゲタソ (「玉塵抄」[1563]：巻14・ 6 オ)

(13) 藤原 (1978：621) では、V＋サガルが卑罵語として用いられる地域として、島根県のほかに、鳥取県・三重県・岐阜県などを挙げている。

(14) 野原 (1992) は、「③侮蔑のクヮインは次のように用いられる」(野原 1992： 9 (下線は野原による)) と述べ、次の例を挙げており、「喰らう」に当たる形式と考えられる。

II. ヘーク　ソーソー　クヮレー (早く早々食らえ)
　わーヌ　ムヌ　クヮトーン (豚が餌をくらっている) (野原1992： 9)

調査資料

日本語歴史コーパス：国立国語研究所 (2024)『日本語歴史コーパス』https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/ (2024年 8 月31日確認) ／名語記：北野克 (写)・田山方南 (校閲) (1983)『名語記』勉誠社／応永本論語抄：中田祝夫 (編) (1976)『応永二十七年本論語抄』勉誠社 (調査には、北﨑勇帆氏作成のテキストデータも使用した) ／玉塵抄 (国会図書館蔵本)：国会図書館デジタルコレクションにより閲覧。https://dl.ndl.go.jp/pid/2606749／史記桃源抄：亀井孝・水沢利忠 (1965-1973)『史記桃源抄の研究』日本学術振興会 (住谷芳幸氏によるテキストデータ (http://www.nabaya.net/kaken.htm) も調査に用いた。) ／四河入海 (国会図書館蔵本)：国会図書館デジタルコレクションにより閲覧。https://dl.ndl.go.jp/pid/2609732／三体詩絶句抄：『三體詩絶句抄』(国文学研究資料館所蔵) 出典：国書データベース，https://doi.org/10.20730/200008276／邦訳日葡辞書：土井忠生・森田武・長南実 (編訳) (1980)『邦訳　日葡辞書』岩波書店／『古語大鑑』：築島裕 (編集代表) (2016)『古語大鑑　第 2 巻 [か～さ]』東京大学出版会／虎明本狂言：大塚光信 (編) (2006)『大蔵虎明能狂言集翻刻註解上巻』清文堂出版／『日本国語大辞典　第 2 版』(小学館)：ネットアドバンス社 JapanKnowledge Lib を用いた。

参考文献

青木博史 (2010)『語形成から見た日本語文法史』ひつじ書房.

加藤正信 (1997)「全国方言の敬語概観」林四郎・南不二男 (編)『敬語講座 6　現代の敬語 (第 3 版)』明治書院，pp.25-83.

來田隆 (1997)「院政・鎌倉時代に於けるキルとヲリ」鎌倉時代語研究会 (編)『鎌倉時代語研究20』，武蔵野書院，pp.5-24.

來田隆 (2001)『抄物による室町時代語の研究』清文堂.

金水敏（2001）「文法化と意味―「～おる（よる）」論のために―」『国文学解釈と教材の研究』46（２），学燈社，pp.15-19.
金水敏（2006）『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房．
澤田淳（2017）「日本語の卑罵語の歴史語用論的研究―「～やがる（あがる）」の発達を中心に―」小野寺典子（編）『発話のはじめと終わり―語用論的調節のなされる場所―』ひつじ書房，pp.145-186.
瀬良益夫（1957）「万葉集における有情とその存在の表現―「ゐる」「をる」を中心として―」『語文研究』６・７，九州大学国語国文学会，pp.74-82.
角田太作（2009）『世界の言語と日本語〈改訂版〉―言語類型論から見た日本語―』くろしお出版．
西谷龍二（2022）「卑罵語ヤガル（アガル）の用法の拡張について」『語文』119，大阪大学国語国文学会，pp.77-63.
西谷龍二（2023）「中世末期から近代における大阪方言の卑罵語オル・ヨルについて―前接動詞の変化と非情物主語の出現を中心に―」『待兼山論叢　文学篇』57，大阪大学大学院人文学研究科・文学部・大阪大学文学会，pp.21-40.
沼田貞子（1979）「存在を表す「あり・をり・ゐる」について―中古の仮名文学作品における比較を中心に―」『山口国文』２，山口大学，pp.27-37.
野原三義（1992）「那覇方言敬語論ノート」『沖縄国際大学文学部紀要　国文学篇』20（２），沖縄国際大学文学部，pp.1-22.
藤原与一（1978）『昭和日本語方言の総合的研究　第１巻　方言敬語法の研究』春陽堂．
矢田勉（2001）「くさる（腐る）」山口明穂・秋元守英（編）『日本語文法大辞典』明治書院，p.207.
柳田征司（1991）『室町時代語資料による基本語詞の研究』武蔵野書院．
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究　近世編』武蔵野書院．
湯澤幸吉郎（1929）『室町時代の言語研究』大岡山書店．
吉田金彦（1971）『現代語助動詞の史的研究』明治書院．
森山卓郎（2021）「下位待遇表現の体系―いわゆるマイナス待遇・卑語・軽卑・卑罵などの表現をめぐって―」早稲田大学日本語学会（編）『早稲田大学日本語学会設立60周年記念論文集Ⅱ　言葉のはたらき』ひつじ書房，pp.293-311.
Silverstein, Michael（1976）“Hierarchy of features and ergativity” R. M. W. Dixon（eds.）*Australian Institute of Aboriginal Studies*. Canberra: Australian institute of Aboriginal Studies, and New Jersey: Humanities Press, pp.112-171.

（にしたに・りゅうじ　本学大学院博士後期課程）